

# ひとすじの道

## — 1つの道を貫いた人々 —

**僧: 栄叡、普照、鑑真 (688-763)**

「天平の薨」井上靖著（新潮社 2005 新潮文庫）  
遣唐使として唐に渡った僧、栄叡と普照は高僧鑑真を訪ね、伝戒の師の推薦を頼んだ。鑑真は言った。「私が行くことにしよう。」

**時計職人: ジョン・ハリソン (1693-1776)**

「海時計職人ジョン・ハリソン」ルイーゼ・ボーデン文 エリック・ブレグバッド絵  
片岡しのぶ訳（あすなる書房 2005）  
何百年もの間、船は現在地を知らずに大海原を航行していた。安全な航海には経度を測定する方法が必要だ。ジョン・ハリソンはこの難問に挑む。

## 過去から

**船乗り: 大黒屋光太夫 (1751-1828)**

「大黒屋光太夫」山下恒夫著（岩波書店 2004 岩波新書）  
天明2年(1782)、遭難した神昌丸はアリューシャン列島に漂着し、ロシア人と遭遇する。船頭大黒屋光太夫は仲間とともに生き延びる道を懸命に探る。

**生物学者: チャールズ・ダーウィン (1809-1882)**

「ダーウィンと進化論」大森充香訳（丸善 2009）  
大学生のダーウィンは、ある本からカナリア諸島への興味を強く持った。1831年、イギリス政府は世界一周航海に出るビーグル号に乗船する博物学者を探していた。最初の訪問先はなんとカナリア諸島だった。

**作家: ハンス・クリスチャン・アンデルセン (1805-1875)**

「ぼくのものごたがり アンデルセン自伝」高橋健二訳 いわさきちひろ絵  
（講談社 2005）  
初めてつくったおはなしは、子供の頃、めったに行けない芝居のピラから自分で考え出した芝居。  
『わたしの一生は美しい童話です。』で始まる自伝。

**宣教師: マザー・テレサ (1910-1997)**

「マザー・テレサ愛はかぎりなく」沖守弘著（小学館 1997）  
『私は神に捧げた身ですから、いま私がしていることはヒューマニズムでもなんでもないんですよ。ごく当たり前のことなんですよ。』  
写真が語るマザー・テレサの世界。

**国文学者: 犬養孝 (1907-1998)**

「万葉の旅 増補改訂 上・中・下」犬養孝著（平凡社 2003 平凡社ライブラリー）  
犬養孝は万葉集に歌われた日本各地をくまなく歩き、研究を積み重ねた。本書によって私たちは、古代の心と触れあうことができる。

**冒険家: 神田道夫 (1949-?)**

「最後の冒険家」石川直樹著（集英社 2008）  
神田道夫は熱気球によるエベレスト越えにも挑む冒険家だ。  
2008年、ジェット気流を利用して太平洋の熱気球横断に挑むが・・・。

**建築家: アントニオ・ガウディ (1852-1926)**

「ガウディの伝言」外尾悦郎著（光文社 2006 光文社新書）  
サグラダ・ファミリアはガウディ死去後、今でも建築途中だ。そこで彫刻を彫り続けている著者が、ガウディがサグラダ・ファミリアに込めた祈りを伝えてくれる。

**化学者、物理学者: マリー・キュリー (1867-1934)**

「キュリー夫人伝」エーヴ・キュリー 河野万里子訳（白水社 2006）  
『母はずっと、私がこの世に生まれ得るはるか前の、夢を追う貧しい学生、マリア・スクウォドフスカとしての心のままで、生きていたように思われる。』  
娘のエーヴが綴るマリー・キュリーの伝記。

**近畿大学水産研究所**

「世界初！マグロ完全養殖」林宏樹著（化学同人 2008）  
「海のダイヤ」の異名を持つクロマグロ。夢のまた夢と考えられたこのマグロの完全養殖に近畿大学水産研究所が立ち向かっていく。

**水泳選手: 北島康介 (1982-)**

「前略、がんばっているみんなへ」北島康介著（ベースボール・マガジン社 2008）  
目標を持って、夢をあきらめないで。今現在も挑戦をし続けている北島選手が水泳をしている皆に自身の思いや思い出を伝える。

**物理学者: 小柴昌俊 (1926-)**

「物理屋になりたかったんだよ」小柴昌俊著（朝日新聞社 2002）  
1987年、「カミオカンデ」は16万光年彼方の超新星からのニュートリノを観測し、物理学の新しい分野をつくる。  
ノーベル賞を受賞した小柴さんが夢を見て、実現してきた歩みを語る。

**医師: 久留宮隆 (1959-)**

「国境なき医師が行く」久留宮隆著（岩波書店 2009 岩波ジュニア新書）  
大病院に勤務する中で、医者としての壁に突き当たる著者。自分が本来目指していたものを確かめようと、勤務先をやめ、「国境なき医師団」の一員として、アフリカのリベリアへ発つ。

## 現在(いま)へ

**三味線奏者: 上妻宏光 (1973-)**

「三味線ランナー」本間章子著（東京書籍 2001）  
古典にロック。津軽三味線の若き実力者、上妻宏光は奏法と楽器自体のオリジナリティによって三味線を知らない世代にその素晴らしさを伝える。

**登山家: 山野井泰史 (1965-)、山野井妙子**

「凍」沢木耕太郎著（新潮社 2005）  
『自分が登ることで壁に一本の美しいラインが引かれる。』  
山野井夫妻は、ヒマラヤのギャチュンカン北壁から登頂を目指す。